
夏季限定冷やしれーめんはじめました。

nike

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏季限定冷やしれーめんはじめました。

【Nコード】

N7148R

【作者名】

nike

【あらすじ】

偶然、幼女のシスターに出会ってつきまとわれる話。
話の鍵を握るれーめんとはいったい……とかいいつつ早めにねたばれしてみたり。

夏頃、某サイトの短編コンテスト用に書いた小説ですが今更、投稿してみます。

行路にてれーめん屋を発見する

夏季限定冷やしれーめんはじめました。

道路の向かい側に建つ、今にも倒壊しそうな推定建築年月日が昭和初期の平屋建ての前にはそんな歌い文句の看板が放置されていた。

大胆にも道路にかなり迫り出している。

否が応でも視界に入れて通行人に興味を持ってもらおうという魂胆だろう。

車を通らないからこそなせる技。

まあ、もっとも徒歩の人間もそれに応じて少ないのだが。坂道の途中なので自転車は言わずもがな。

看板はダンボールを折っただけの極シンプルな物。

雨と強風にとっても弱そう。

字は子供が書いたんだろう、大胆不敵、恐れを知らない内面を滲み出すかのようにダイナミック。

それが故に読みづらいのはご愛嬌だろう。

特にめの字なんかは単体で出品されるとあとの判別に困りそうである。

そこまでじっくりと観察してまず思ったのは、れーめんというのはおそらく冷麺のひらがな表記で、しかし冷麺とは冷やした中華蕎麦の事でありその上にさらに冷やしと形容詞をつけるのは二重表現なのではないのだろうかという事だった。

具体例としては頭が頭痛、お腹が腹痛とか。

……何故、自分が即座に思いついたのがこの二つだった事は脇に置いて。

この店は冷麺の存在を店先で主張するぐらいなのだから中華料理店、あるいは飲食店なのだろう。

屋根には畳みよりも少し横に長い程度の大きさの板が掲げられていた。

ただし長年、風雨に晒されていた上に適切な処置もしてもらえなかったらしくほぼ無地になっていた。

今では薄水色の文字の名残が窺い見れるだけである。
とてもではないが解読は不可能。

肝心の店舗は初めに言った通り、どう見ても少々古めの平屋建てにしか見えない。

全面すりガラス障子張りの家先、いや店先は半分ほど開け放たれ

ているので中を覗き見る事が出来るのだが、今時珍しい広々とした土間にこれまた昔ながらのお子様に優しくない激しい段差と外見に相応しい内装だ。

どう見ても一般家屋そのものである。

屋根にでんと白い板が乗っていないければ間違えても店には見えない。

そして乗せてあったとしても百歩譲って親近感を滲み出した民宿はありとして、飲食店には見えない。

さらに先程はあえて述べなかったが、意図した物とは思えない傾斜の屋根には青々とした苔が生えており、わびさびを通り越して寒々しさを感じさせる。

ここで食事をしようという気持ちにはまったくなれない。
衛生面でどこまでも不安である。

丸見えの室内は正午前にも関わらず暗闇が広がっており、閻魔大王の住処に繋がっていると言われたら、小学生の頃の僕なら無条件で信じただろう。

その辺を覗けばどこからどう見ても田舎に行けば一軒ぐらいは生き残ってそうな平屋建てである。

冷麵の看板とはどこまでも無縁そうな。

否、一つだけ違いがあった。

四畳半程の広さがある土間には木製の棚が中央と両端に鎮座していた。

なんせ僕が今立つ屋外は太陽が今日、今年の最高気温をたたき出してやろつと言わんばかりに張り切っているのだが屋内は決して薄くはない影に包まれているもので、明るさに慣れた僕の両目では土間と玄関の段差ぐらいは判別できるとしてもその他はのっぺりとした黒色にしか見えなかったのである。

中身はもれなく空っぽ、かといって一昔前にお昼の主婦向け番組に旋風を巻き起こしたボックスショップを開こうという訳でもないだろう。

形状から推測するにあれは恐らくお菓子が入れてあったのだろう。

だが、過去形である。

今後そのようになる予定はない。

つまりこの店はかつては駄菓子屋だったのだ。

小柄なお婆ちゃんが店先でちょこんと正座しているなんともノスタルジックな。

と平成生まれが伝聞でしか聞いた事のない昭和を懐かしんでみる。

しかしそれならばなぜ冷やし中華の看板を出すのだ。

駄菓子屋が新規開拓の為に新メニューを導入する可能性はかなり苦しいが一応、無きにしもあらず。

だが、駄菓子屋は既に店として機能していない。

新規開拓以前に開拓地がすべて没収されている状態なのに。

何故。

そんな事を考えていたらいつのまにか元駄菓子屋に接近していた。無意識のうちにである。道路をふらふらと夢遊病患者のような状態で端から端まで横断していた訳で。

街中だったらはねられていた。

間近で見る店内は相変わらず薄暗く人の気配を感じさせない。しかし埃などは積もっていない事からして無人ではなさそうだ。ここにはいないが奥の方に誰かいるのだろう。

入り口もガラス障子なら室内の扉もガラス障子だった。ガラス工場に弱みでも握られているのかも知れない。

土間を上がってすぐの所に同じように開け放たれた障子があつて広がる畳が見える。

目算だが六畳ぐらいか。

家具は何も置かれていない。

その先にもまだガラス障子があつて人、一人が通れるぐらいに開かれていた。

暗くよく見えなかったので意識こそあったもののまたふらふらと土間を進み、土足で侵入できるぎりぎりまで接近してみようやく視認できた。

どうやらそこは台所になっているようで突き当たりの窓にぶら下

げられたお玉が逆光で首吊り死体に見えない事もなかった。

いや、スプーン部分が下向きなのでどちらかというとタロットカードの死刑囚か。

何気なしに天井を見上げると電球がそのままぶら下がっていた。

こちらも近年まれに見る光景である。

店内にて発見する

「もし、そこのお方」

そんな感じで自分の考えにふけていたのでかけられた声にすぐには気づけなかった。

返答は自分の耳にもかなり間抜けな物として届いた。

「はあ」

「ようこそ」

「ええっと……」

甲高い子供の声である。座敷童を疑ったがあれは会話が成り立つたかどうかどうしても思い出せない。

今度は戸惑いこそあったものの十秒もかからなかったと思うのが声の主は相当、短気な性格の持ち主らしい。返ってきた声には随分ととげが含まれていた。

いや、冷静に考えると人様の家先を塞いでいる怪しい男にける言葉としては順当な物のようにも思えてきた。

しかしようこそと言っていたし店先なら自分でいうのもあれだがノ
ープロブレムなはずなのだけれども。

「除霊ですか？ それとも守護霊判断ですか？ 来世及び前世診断
はあまり得意じゃねーのですけどお望みならなんとか頑張りますが」

早口でそうまくし立てた後、適当な事言っちゃってもばれないも
んねと恐らく本人にとっては小声と思われる追記も耳に入った。

一体、本体はどこにいるのだろうと天井に向けていた視線を正面
に下げてもまだいない。

「で、どれにするのです」

さらに下げてようやく見つけた。

いつのまにか子供がすぐ目の前に立っている。靴下を入っていない
小さなつま先は両足ともちょこんの敷居の上に乗せられていた。
桜貝のような爪は少々、深爪気味だった。

とまあ、足は非常に開放的な姿なのだが子供は実に奇妙な服装をしていた。座敷童がよかったと言いたくなるぐらい。

一言で言うのなら修道女、シスターである。

小さなシスターがそこには立っていた。日曜朝の魔法少女物って今は修道女になってたつけと首を傾げなくなる光景である。

子供は男女両方とも声が高いのでいまいち判断がつきかねたが服装から推測するに恐らく女の子だろう。

うつかり入れ損ねたのか、でこ丸出しは可愛くないという美意識の元に実行されたのかは不明だが額から鼻梁にかけて少々長めの前髪がかかっており、色は黒。

「何をじろじろと見ているのです」

「うわあ、喋った」

「驚かれた!？」

冗談である。

不満を露にする子供シスターの身長は僕よりも頭、一つ分ぐらい下にある。

しかしたしか僕の立っている土間と彼女が立っている畳の上には

かなり大きな段差があるので実際の身長は僕の腰よりも少し上ぐらいか。

身を包んだ修道服は紺色で首からはシスターらしく鈍く光る十字架が下げられていた。

それを取り巻くように巻かれているのは黒色の数珠とそれよりは小粒な紫の数珠。

すぐれるものならなんでもいいという考えが見えた気がした。

何教なんだ結局、といった感じである。

これで箒をはきながら前進してくれないかなと淡い期待。
天才児の近所に住むおじさんではない。

「もう、何なのです。客ではないのですか。急に黙ったり驚いたりして」

「客って言う事はやっぱり何か商売をしてるのか……」

思わずもれた独り言だったがシスター、過敏に反応する。

「え、何も知らずに来たのです!？」

さすが子供、いちいち反応が大きさである。

信じられな一と言わんばかりに両手を口にあてじりじりと後退し微妙に距離をとってくださった。

感染病か何かかと問いたい。

店内にてれーめんの意味を知る

「その看板が気になって。何、冷やし冷麺って」

「あれ、ねつとみ！　じゃなくてアナログ方式の人でしたか。正直、効果は期待してなかっただけに意外です」

何やら内情を暴露しつつ考える素振りに移るシスター。

邪魔するのは心悪いが気になる物は気になる。

「そのねつとみ！　って言うのは……」

「全国から集まる老若男女を問わないあらゆるユーザーで形成されたコミュニケーションサイト、ねつとくちこみ！　の略です。言わばオンライン上で色んなお店の情報交換をする場所だったのです」
「で、ここが紹介されてるわけか」

「ええ、まあそうですね。少し語弊があります。正しくは誰も紹介してくれないのでこの私が色んなユーザーを装って盛り上げたといひましようか」

「……ああ、自演ね」

「ジエン？　ルパン三世は私、五右衛門が好きなのですけど」

修道服を着るといふづつ飛んだ思考からしてもしやと思っていたがやはりアニメ好きなお子様だったと折り畳み傘を不要と判断して家を出た瞬間に雨に降られた気分。

「問題にならなかったのか」

「ええ、何も。ただ、サーバーがダウンしてしまったのかその翌日から見えなくなってしまうてどうなのかさっぱり不明なんですけどね」

「ばれて、アクセス制限されたんだろうねー」

「あくせす星雲？ アンドロメダより遠いのですか？」

何やら語弊やら何やら年齢の割には難しい単語を連発していたのだけれども所々、おかしい箇所がありもしやと思っていたらやっぱりそうだった。

無理して使ってみているだけらしい。

しかしアンドロメダ星雲を知っていたのは意外。

「ええっと何の話をしていたのでしょうか……」

子供シスター頭を抱えてお悩み気味。俯いたその表情は暗い。手持ち無沙汰なのか神に頼ろうとしているのか手は十字架をいじっている。

「冷やし冷麺の意味を知りたいんだけど」
「ああ、それでした。それでした」

頭上に黄色い電球が点滅しそうないきおいで顔があげられる。

「意味ってそのままの意味ですよ。霊を免除するので合わせて霊免です。ね、簡単でしょ」

こんなにも分からないのーと暗に言ってるんじゃないかと勘ぐるのもむなしくなるぐらいの満面の笑みでそう告げられる。

理解不能な単語が多発されたので再起にしばらく時間がかかった。冷麺が冷やし中華の事じゃないのはよく分かったのだが。

何だ、霊を免除って。

「守護霊判断とか来世診断とかもしますけどね。あくまで副業です。ハンバーガー屋さんが出すサンドイッチ！ みたいな」

「じゃあ、上の冷やしって一体、なんなんだ……」

上機嫌で饒舌に語り中のシスターに水を差すのは悪かったが理解しがたい物は無視しがたい。

「ああ、テレビが日本では夏場にそうやって看板を出しておくとか客が入るって言うってたのです。限定物にもよえーので夏季限定と上につけると効果が倍増だとか。テンプレートとしては夏季限定冷やし〜はじめましただそうで」

「要はのりでつけただけか……」

「海苔？ ご飯ですよはマスオさんの顔が思い浮かんであまり好きじゃないのですけど」

「あれは厳密にはマスオさんじゃないような……。でもまあ、いいか。ありがとう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7148r/>

夏季限定冷やしれーめんはじめました。

2011年10月7日00時33分発行